

# ヤスパーズとフッサール

## ——精神病理学の哲学的基礎——

山 口 勲

ヤスパーズは実存哲学者として著名になったが、初めは精神医学者として出発している。彼は初め、経験科学の限界内で精神病理学を研究し、後に包括者の哲学を確立した。

フッサールは超越論的現象学者として著名になったが、初めは記述的現象学者として出発している。彼は初め、経験科学の限界内で記述的現象学を研究し、後に超越論的現象学を確立した。

ところで、ヤスパーズの精神病理学研究の基礎には、フッサールの記述的現象学の方法が適用されている。すなわち二人は当初、共通する学問的方法をもちつつ、後に異なった哲学を確立したのである。しかし彼らの出発点に、経験科学を踏まえた共通の学問的態度があるとき、二人の哲学者が後に建設した哲学にも、経験科学を包括する包括者の哲学と、経験科学を超越する超越論的現象学という、共通のパターンが見出せるように思われる。

この小論は、ヤスパーズの精神病理学の方法論的基礎を分析する作業を中心とする。そしてヤスパーズの包括者の哲学とフッサールの超越論的現象学とが、科学に対処する哲学の在り方において相通じる意図をもつことを予示するところで、ひとまず終ることになるであろう。

### [ 1 ]

ヤスパーズの《精神病理学総論》の初版<sup>1)</sup>は、1913年に出版されている。この書物は、在来の精神医学の方法を検討し再編成するとともに、当時の学界に

影響力をもった二つの哲学的方法を早くも導入し、精神病理学の古典的集大成を図ることによって、以降の精神病理学研究の流れを大きく左右した記念碑的な業績である。しかも現代のように、精神医学の研究が時代的関心を集めるようになりながら、またその方法論的行き詰まりもとやかくいわれるようになってくると、実存哲学者としてのヤスパーズよりか、精神医学者としてのヤスパーズの方をまず洗い直してみることに、思想的関心が向けられてゆく。

ヤスパーズの《精神病理学総論》は、方法論的に三つの思想的背景をもっていると考えられる。

- 1) フッサール初期の記述的現象学の方法を修得し、この方法を、精神的症状を記述する基本的な手続きとして採用した。
- 2) グリーゾンガーやウェルニッケの、精神病を局所的な脳病に限定する脳病理組織学的研究を排除した。そして従来<sup>レ</sup>の身体医学を、精神現象を感覚的に知覚しうる病状とその因果的関連の問題として秩序づけ再編成した。
- 3) デイルタイの解釈学やウェーバーの理解（了解）社会学の方法を修得し、この方法を、精神現象の記述を関連づけ了解する基本的な手続きとして採用した。

《総論》の第一版は緒言と七つの章からなるが、ヤスパーズは実際に緒言と第四章までに、上の三つの方法を骨子として精神病理学の骨格を造り上げている。すなわち第一章は、精神生活の主観的現象を研究する現象学（第一の方法）、第二章は精神生活の客観的病状を調べる客観的精神病理学（第二の方法）を扱う。そして次に精神生活の諸関連をみるために、第三章は了解的関連を研究する了解精神病理学（第三の方法）、第四章は因果的関連を調べる説明的精神病理学（第二の方法）を扱っている。

続けてヤスパーズは、精神生活における——知能と人格（第五章）、病像の組み立て（第六章）、社会学的関係（第七章）を扱い、精神病理学の〈総論〉を仕上げている。しかし第五章以降は、第四章までの方法論の総合的な適用であるから、その成果は方法論の出来次第で決まる。従って我々の主な作業は、ヤスパーズの精神病理学における三つの骨子と、この骨子から組み立てられている骨格を

分析し、その問題点を摘出することであろう。

## [ 2 ]

ヤスパーズは精神病理学を研究する方法論の基本的手続きを、次のように考えている。精神病理学は病的な精神現象の全体を研究対象とするが、そのためには何よりもまず、精神現象の事実が集められねばならない。この事実は、主観的体験と客観的観察によって得られる。そして病的な精神生活の主観的現象——患者の体験——を記述するのは、現象学である。精神生活の客観的症候を記述するのは、客観的精神病理学である。《総論》は第一章で現象学を扱い、これを第三章の了解関連（了解的精神病理学）へ接続する。第二章では客観的精神病理学を扱い、これを第四章の因果関連（説明的精神病理学）へ接続する。

さてヤスパーズは、精神生活の主観的体験の事実を集める基本的方法として現象学を採用するが、彼はこの現象学の課題を記述に置き、記述としての現象学の限界を明確にする。ヤスパーズのいう現象学とは、次のようなものである。現象学の課題は、患者の体験する精神状態を直観的に心に描き、その近縁関係に従って観察し、できるだけ明確に境界をつけ、区別し、術語をつけることである。また精神的なものは身体的なもののように感覚的に知覚できないから、行なえることは、心の中に描き出し、感入し、直観し、了解することである。そして症例ごとに心的状態の外的標識のいくつかを枚挙し、それが現われる諸条件を枚挙し、感覚的に分かる比喩や象徴を用いたり、一種の暗示的な描出を行なったりすることである<sup>1:41</sup>。

この記述的現象学の方法をもって、ヤスパーズが摘出した重要な事例がある。例えば、実体的意識性の事実、病的現象としては妄想知覚、妄想表象、妄想覚性、それに自我意識障害の分析など。しかし、ヤスパーズが記述的現象学を主観的体験の事実を集める基本的方法として採用した意図は、もとよりここに留まるものではなく、この事実の記述を、精神的なものとの関連を了解するための素材とすることであった。彼はこの関係を次のように解説する。

「現象学はわれわれに 実際体験された 精神的なものの断片、要素をいくつも

提供してくれる。すると今度は、こういうものがどんな関連を作っているかが問題となる。ある場合には精神的なものが精神的なものから、はっきりとそうわかるように、明証性をもって出てくることをわれわれは了解する。われわれはこのように精神的なもののみによりある様相で、攻撃された者は怒り、裏切られた恋人はやきもちをやくことを了解し、動機からこうしようという決心と行為が起ってくることを了解する。現象学ではいろいろの性質とか状態とかを心の中に描き出すのであり、それを静的な了解というが、今ここで述べているのは一つのものから他のものが出てくることがわれわれにわかるというので、これを発生的な了解という。」<sup>1:27</sup>

こうしてヤスパーズは問題を処理してゆく手続き上、まず精神的なものの断片を摘出し記述することから始め、次にこの記述の関連を考察するという。そして彼はこの現象学的記述から了解関連への移行を、感情の記述から感情移入の了解へ、あるいは体験的記述から追体験の了解への移行として説明しているのである。

さて以上のことから、我々の留意しておく問題は次の二点である。1)ヤスパーズにとって、現象学的記述は了解関連を考察するための手続き上、基礎的とはいえず、むしろ下位的位置を占めている。(ここに、記述的現象学の評価をめぐって、ヤスパーズとフッサールの分れ道が生じる。) 2)ヤスパーズは現象学的記述を静的了解、了解関連を発生的了解として区別するが、どちらも〈了解〉であるところから、記述と了解とを追体験や感情移入を介して問題なく接続させている。(ここに、記述(説明)と了解との分離と結合の関係をめぐって、P・リクールの解釈学的現象学の問題が生じる。)ともかく我々ここでは、ヤスパーズが現象学よりも解釈学を重視していたことを指摘しておくに留め、再び〔6〕でこの問題を採り上げることにする。

### 〔 3 〕

ヤスパーズは精神生活の客観的症候の事実を集める課題を、客観的精神病理学で扱い、次いで精神生活の因果的関連を考察する課題を、説明精神病理学で

論じる。この移行の 関係は、先の現象学と 了解関連の 移行の 関係と同じである。すなわち客観的精神病理学の基本的方法は客観的記述であり、説明精神病理学の基本的方法は客観的説明である。そしてここでも、記述は因果関連を考察するための手続き上、基礎的とはいえ、むしろ下位的位置を占めるが、記述から説明への移行は問題なく行なわれる。

さてこの客観的な記述と説明を扱う部分に、ヤスパーズによってもたらされた特に新しい内容上の成果はない。しかしこの部分でヤスパーズが、伝統的な身体医学の客観的な症状を、主観的な症状と厳密に区別し、方法論的に記述と説明の適用範囲を明確に位置づけ、伝統的な身体医学の再編成を図ったことは重要である。特に当時のドイツは、グリージンガーやウェルニッケの脳病理組織学研究の後に、クレペリンの〈早発性痴呆〉・〈躁うつ病〉の二大内因精神病の分類があり、同じ頃ウィーンではフロイトの精神分析理論が流行していた状況を考えると、ヤスパーズがこれらの諸思想に理論的秩序を与えようとする問題意識は重要である。

ヤスパーズは《総論》の緒言の第二項目で、〈精神病理学における諸先入見〉を三つ挙げている。その第一は〈身体的先入見〉、第二は〈哲学的先入見〉、そして第三は〈正しい見解の誇張、いろいろな見地の絶対化からくる先入見〉である。ヤスパーズ自身が先入見に挙げている個々の事例を離れて、当時の精神医学的な研究状況を当てはめていえば、次のようにいえるであろう。それは例えば、グリージンガーの脳病理学の標語である「精神病は脳病である」という〈脳神話〉にみられるように、精神現象をすべて大脳という局所と関係づけようとする先入見である。ヤスパーズは精神現象と身体現象の関係を否定してない。彼が拒否するのは、記述、説明、了解、という科学の方法論的根拠なくして、二つの現象を大脳で関係づけようとする、いわばあのデカルトの〈松果腺〉説以来の、身体と哲学と精神病理学との混同である。むしろヤスパーズはこの混同に交通整理を与えることによって、例えばクレペリンを念頭において早発性痴呆を因果関連と了解関連の一つのモデル例として呈示したり、フロイトが説明と了解を混同する科学的虚構を排除し、フロイトをすぐれた了解心理学者

として位置づけもするのである<sup>1:185</sup>)。

以上のように、ヤスパースが客観的な病理学を扱う思想的背景を考察しておけば、彼が実際に精神病理学的材料をどのようにまとめたかは、簡単に説明しておくことで十分であろう。

第二章は、感覚的に知覚できる客観的な出来事を、外部から捉えようとする。第一章は現象学という心理学をやったが、これからは客観的な心理学をやるというわけである。そこでヤスパースは、精神物理機構の働きを扱う作業心理学、精神現象に伴う身体的変化を扱う病状的心理学、心の表現を扱う表現心理学の諸問題を、できるだけ客観的に記述するのである。

第四章は、第二章で分析記述した諸要素のうち、一つを原因とし他をその働きの結果として考察する精神生活の因果的関連を扱う。そしてヤスパースは、自然科学的な因果関係をできるだけ広く求めて、外因性原因の作用や内因性原因の作用について詳しく説いた後、更に身体的な原因による〈経過の型〉まで論じている。

客観的病理学における記述や因果関連は、その当時の自然科学や経験科学の発達に依存せざるをえないが、これらの学問の発達は原理上、際限がない。従ってヤスパースの成果は、当時の科学的水準による材料の方法論的再編成であることはいうまでもない。

しかしむしろここで留意すべきことは、ヤスパースは精神病理学における身体的側面やその因果関連を決して軽視してないことである。現在でも、実存主義的な哲学の影響下にある精神病理学が、ややもすると身体の研究を無視したり、身体が精神に与える影響を度外視する傾向にあるとき、ヤスパースが身体側の研究を精神側の研究と同等に取扱うという、研究の限度をわきまえてかかるその科学的な研究態度は、注目されるべきであろう。現代の精神病理学は再び、主要な精神疾患、特に分裂病に対する生物学的な基盤のあること、とりわけ精神機能に対する脳の化学的、物理的機構（分裂病の精神薬理）を無視できないからである<sup>2)</sup>。

## 〔 4 〕

かくてヤスパーズの精神病理学は、精神生活の関連を発生的了解（了解関連）と因果的説明（因果的関連）という、人間認識の二源泉によって解明したのであるが、この研究方法はまさにデュルタイの「自然を我々は説明し、精神生活を我々は了解する」という解釈学の根本的区別に従っていることは明らかであろう。それとともにヤスパーズは、区別されたこの了解と説明の各々が認識できる領域の限界を示すことも怠らなかつた。

まず説明の側からみると、説明は精神的現象において、その原因と結果とが何であるかを問題とすることができる限り、どんな場合にでも通用する。しかし説明はあくまでも、因果の説明であることが限界である。次に了解の側からみると、了解は関連を求めて研究を進めると、了解不能な二つの境界に突き当たる。一つは、越えることのできない意識の外にあるもの、すなわち身体として我々を担っているものである。この境界の彼方には、因果関連によって研究されるべき生物学的生理学的な科学の世界がある。了解心理学は、この了解の限界において因果説明の必要を生じ、〈病的過程〉の問題が考え出されるのである。しかしもう一つの境界は、了解可能なものの源泉として、了解しうる以上のものである。この境界の彼方に、ヤスパーズは後に、包括者の世界、実存的交わりの世界を自覚するようになる。

するとヤスパーズの《精神病理学総論》は、第四章までに了解関連と因果関連の各々に限界を与えつつ、第五章以降では、その限界内で考察しうる限りでの了解と因果の関連を、知能や人格、病像の組み立て、社会学的関係、において扱ったということになる。しかし同時にこの書物は、因果説明では扱えない、また了解しうる以上でもあるもの、そして第五章以降でも扱えない領域を消極的ながら残したことになる。ヤスパーズはこの領域を、後に哲学の道を辿りながら次第に包括者の世界として自覚してゆくことになる、と考えるのが我々の理解の仕方なのである。この予想の道程を、我々は《総論》の緒言の中で追求してゆくことにする。

《精神病理学総論》の緒言は、四つの項目に分けて《総論》全体を概観しているが、その第一の項目は〈精神病理学総論とは何か〉である。ここでヤスパースが二つの限界を明らかにしているのを續みとすることは重要である。一つは精神病理学の内にある限界であるが、他の一つは精神病理学それ自身の限界である。

第一の限界は、すでに述べたように、ヤスパースが精神医学と身体医学とを公平に扱う学問的態度から出てくる。それは、彼が了解関連と因果関連とを方法論的に区別し限界づける態度に、明確に現われている。精神病理学は、「身体的変化を調べる時には精神的原因のことも考えなければならず、精神的变化を調べる時には身体的原因のことも考えねばならない」<sup>1:18</sup>のように、ヤスパースは精神病理学を一つの方法だけで処理することを絶対に拒否する。この事情を彼は次のように、比喩的に書き表わしている。

「これはあたかも未知の大陸を二つの側から探検するのに、その間に入りこめない広い土地がいつまでも残っているので両探検者が出会えないのと同様のことである。われわれは精神的なものとの間の因果の鎖の両端の輪しか知らない。われわれはこの両端から進んで行くのである。」<sup>1:17-18</sup> この比喩は二つのことを語っている。第一に、未知の大陸を両端から探検する学問は精神病理学であるが、両探検者、すなわち了解と説明は出会えない。第二に、この精神病理学を扱うのは精神病理学者である。するとこの比喩は、精神病理学者の入り込めない広い土地がいつまでも残ってしまうことを指摘しているのである。この第二の点は、すでに第二の限界、すなわち精神病理学それ自身の限界を予知していると思われる。

第二の限界は、従って精神病理学とこの学問の入り込めない広い土地との関係から出てくる。この事情をヤスパースは、次のように説明している。「この限界がどういうことによるかという、精神病理学者が一人一人の人間を取扱う時に、この人間をこの学者の用いる心理学的な概念ですっかり割切って片づけてしまうことが決してできないからである。概念や類型や規則にあてはめてしまえばしまうほど、はっきりとわからないものが隠れて残っていることが、



ますますわかって来る。このようなものはしっかりとつかめないが、おぼろげにあることが感じられるようなものである。精神病理学者としては、個々の人間は無限で汲み尽すことができないということを知っていればよい。精神病理学とは関係なしに、人間としてはもっと多くのものを見ることもできよう。或いは誰かがこのもっと多くのもの、ユニークなものを見る時に、その中へ精神病理学を持ち込んで論じてはならない。殊に道徳とか美学とか形而上学に関する価値は、精神病理学的な価値の定め方や分析の仕方とはまったく関係がないのである。』<sup>1:14)</sup>

この引用文でヤスパースは、個々の人間は無限で汲み尽すことのできないことを前提としながら、精神病理学者として扱える対象の限界と、人間としてはもっと多くのものを見ることのできることを、対照的に語っている。そしてヤスパースは、このもっと多くのものを見ることのできる人間を精神医に見立てて、その任務を次のように考えている。すなわち精神医の扱う対象は、常にひとり一人の人間全体である。彼は「病人の治療や保護にしても、その筋に専門家の意見を述べるにしても、歴史上の人物を精神医学的にどうであるか見分けるにしても、あるいは病人が診察を受けに来るにしても、いずれにしても人間全体を取扱うのである。』<sup>1:13)</sup> そして精神医が精神病理学に通じて、一般的な概念や規則を知る必要があるのは、むしろひとり一人の人間全体を、事例ごとに処理するためである。精神医にとって精神病理学は実践的に診断と治療をするための手段の一つにすぎない。精神医は精神病理学が実践上の手段として役立つとしても、それを本来の目的としてはならない。これに対し精神病理学者の扱う対象は、あくまで概念や類型や規則として表わせうるものに限られ、この学問の中へ形而上学や価値を持ち込んではいないのである。

こうしてヤスパースが精神医の任務と精神医学者の任務とを区別するのは、いわゆる臨床医学と基礎医学、一般的に言って実践と理論を区別するためではない。精神医は、ひとり一人の人間全体を扱う。精神病理学者は、人間の類型的な全体という一般的なものを扱う。それゆえ、個々の人間全体を診断・治療の対象とするとき、人は精神医学者としては彼の限界を厳しく自覚せねばなら

ないが、精神医としては人間としてもっと多くのものを見ることができる。

《精神病理学総論》は、精神病理学の研究を前面に出し、この学問自体の方法と限界を規定しつつ、その背後に消極的な形ながら、人間としての精神医、人間としてひとり一人の人間の全体を扱う精神医のことを秘かに語っていたのである。しかもこのような仕事を任務とする精神医とは、とりも直さず哲学者としての修練を積む人のことであるから、後にヤスパーズがこの任務を積極的に自覚して、精神病理学の研究から哲学の道を志すようになる思想的な動脈は、すでに当時、十分に脈打っていたといえるであろう。

### [ 5 ]

1913年に、ヤスパーズは《精神病理学総論》の第一版やその他いくつかの精神病理学に関する論文を公けにしたが、その後は1946年に大改訂した《総論》の第四版<sup>2)</sup>を公刊するまでは、精神病理学に関する一切の研究を公表していない。彼の関心は精神病理学から、完全に哲学へ移行したようにみえる。そしてその間にヤスパーズは、長い沈黙の後で、主著《哲学》を公刊し、一躍、哲学者として著名になった。しかしヤスパーズの哲学思想は、《総論》の第一版から第四版の改訂に到るまでに、精神病理学者——精神医——哲学者という道程を歩みながら、首尾一貫したテーマを追求し、未地の大陸の間にいつまでも残っている広い土地——無限で汲み尽せない人間——を解明する努力を続けていたのである。そしてこのような人間が、彼の哲学においては正面から、実存的人間として照明を当てられることになるのである。

さてヤスパーズの哲学は、包括者 (das Umgreifende) の哲学である。窮極の包括者は存在するものとしての包括者、全く包括するものとしての包括者であって、蔽として存在するものではあるが、決して見られず永久に知られない。これに対し、我々であるところの包括者がある。この包括者は、現存在とか意識とか精神とか呼ばれて、限界をもつ世界にある。実存的人間は、この両者の間に存在する、いわば実存的包括者である。実存的人間の在り方は、この世界を構成する現存在の各様式に生命を与えるとともに、自分を包む窮極の包括者

への信仰を確信することである。実存的人間はこの両側での自覚を、実存と対極概念である理性との交通意思によって果そうとする。「実存は理性によって明白となり、理性は実存によってのみ内容を得る」<sup>4)</sup>というわけである。

かくてヤスパースは、実存的人間による、いわば実存理性の行なう〈実存照明〉を、哲学の中心課題とした。そしてヤスパースの哲学は、無限で汲み尽せない人間を、決して科学によって対象化できない包括者の一段階として捉え、この人間を理解する方法を、心理学的な了解でなく、伝達と交通による実存照明の了解によって果そうとしたのである。

《精神病理学総論》の第四版は、ヤスパースがこのようにして包括者の哲学を確立した後で公刊されたものである。従って第一版と第四版とを比較すれば、確かに、精神病理学を基礎づける哲学的思索の深化に格段の相違を認めねばならないが、思想上の基本的な変更は全くないと考えられる。いえるとすれば、精神病理学を把握する視座が、精神病理学者としてのヤスパースから哲学者としてのヤスパースへ移行しただけのことであろう。すなわち第一版の《総論》は、精神病理学者のみた精神病理学であったが、第四版の《総論》は、精神医（哲学者）のみた精神病理学になったのである。ヤスパースは主著《哲学》でも、この視座の転換を明確に自覚している。「精神病理学的な認定は、——経験的な知識を与えてくれはする。だがそれらは症状の分析なのであって、実存としての人間を究め尽すものでは決してない。」<sup>5:342)</sup>

以上の原理的な問題を述べておけば、《総論》第四版の内容は、精神病理学と包括者の哲学とを対比して書いている部分を、いくらか抜き出すことに留めておくことで十分であろう。

「心は対象とならぬものであり、包括する者である。」<sup>6:13)</sup>

「病める人間においては、人間の未完性、開放性、自由性、限りえぬ可能性が根底となっている。」<sup>6:12)</sup>

「了解不能なものは実存の中にある。」<sup>7:15)</sup>

「了解心理学は現象や表現や内容や意識外機構を把握する場合には、経験的

心理学となるが、しかし哲学的実存開明ともなれる。』<sup>7:16)</sup>

「一人一人の精神病者は 汲み尽せぬもので、謎と結びついているのだという意識を、たとえ見たところ極くありふれた例についても失いたくないものである。』<sup>7:316)</sup>

「精神療法は心の交通によって患者に 助力し、彼の内心を 深奥まで探って治療に向かういとぐちを見出そうとする試みなのである。』<sup>8:361)</sup>

「医師对患者の関係の 最後のものは、実存的交通であり、——運命を共にする伴侶である。医者はずただの技術者でも権威でもなくて、実存に対する実存であり、他者と共にある移ろいやすい人間という存在である。』<sup>8:365)</sup>

かくてヤスパーズの精神病理学は、第四版に到って包括者の哲学に包み込まれた精神病理学として再生した。そして精神医学者にとっては患者の症状を記述するために話をかわす交わり<sup>1:41)</sup>であったことが、精神医にとっては患者のひとり一人の人間性全体との実存的交通となった。ヤスパーズの精神病理学は、全人格的な人と人との間の血の通った交通を根底としているのである。

## [ 6 ]

ここに到って我々は再び、〔2〕の最後に指摘しておいたように、《精神病理学総論》の第一版における方法論上の問題に立ち戻る。

ヤスパーズの精神病理学は、三つの方法論的骨子から構成されていた。一つは(現象学的)記述であるが、この記述を下構として、二つ目の了解関連(了解)が働いている。三つ目は同じく(客観的)記述を下構として、因果関連(説明)が働いている。ヤスパーズはこの区別された二つの系列の問題を、《総論》の第四章までに扱った。そして第五章以降では、この区別された〈了解〉と〈説明〉との関係から生じる諸問題——知能と人格、病像の組み立て、社会学的関係——を論じた。しかしヤスパーズ自身は、解釈学的方法を適用したこの精神病理学の研究に満足せず、了解と説明という二つの方法(二人の探検者)によって解明のできない広い土地を窮めるために、包括者の哲学へ転換して行ったわ

けである。

ところで、了解と説明の区別および関係の問題は、ディルタイの解釈学やウェーバーの理解社会学以来、区別と関係という、まさに困難な〈関係〉を孕むため、現在でもガーダマー<sup>9)</sup>やリクール<sup>10)</sup>などによって、その解決策が論議されている事柄である。ヤスパーズ自身はこの難問を、ガーダマーやリクールなどのようにあくまでも解釈学的方法の内に踏み留まって解決しようとせず、解釈学の限界を踏まえた上で、包括者の哲学へ転進したわけである。しかし我々はここで、解釈学者が見落してはならない問題——それはヤスパーズが不用意に接続させていた問題——に注目しなければならない。それは、了解と説明の問題でなく、了解と記述の問題である。

ヤスパーズは一方で、客観的症狀の記述から因果関連の説明への移行は当然であると考えている。記述と説明の差異は、もともと同一自科学科内の概念の用法上の相違として処理できるからである。ところがヤスパーズは他方で、現象学的記述を静的了解と命名し、了解的関連を発生的了解と名付けて、記述から了解への移行に何らの違和感を感じていない。この移行は追体験や感情移入の働きによって問題なく接続できると考えている。しかし、もし了解と説明が、単に対象によって客観的と主観的の同一の記述を源泉としているとすれば、記述における同一性が了解と説明における差異性へと展開することになり、解釈学上の問題はリクールの解釈学的現象学の問題を新たに問い直すところまでゆくことになるであろう。

しかし我々は現在、この問題に正面から立ち入ることはしない。我々がここで最後に追求することは、〈記述〉に対するヤスパーズとフッサールの対処の仕方である。ヤスパーズは精神病理学から始め、フッサールの記述的現象学を採り入れた。しかる後に、精神病理学を包み込む包括者の哲学へ転進した。フッサールは記述的現象学から始めたが、後にこの記述的現象学を超越する超越論的現象学へ現象学的還元を深めて行った。従って両者の分れ道に立つ〈記述〉という道標を、二人がどのように読んだのか、その読み方に問題を絞って考察を進めてゆくわけである。

さてヤスパーズは、現象学的記述と了解関連との接続に疑念を指し挿まなかった。彼の主な関心は了解と説明の対比であり、《総論》の第一版の構成からみても、記述は了解や説明の導入部として採用されているにすぎない。このことは、包括者の哲学を根底とする《総論》の第四版で一段と明白になる。またこのことは、ヤスパーズにウェーバーの追悼文<sup>11)</sup>があるように、人格的にも学問的にも、フッサールよりかウェーバーの影響が強かったことの現われであろう<sup>12:40)</sup>。《総論》の第一版でも、方法論で重視すべき書物として、ウェーバーのいわゆる《客観性》(1904)や《ロッシャーとクニース》(1903-1906)<sup>13)</sup>が紹介されているし、特にウェーバーの〈理念型〉は第六章の〈病像の組み立て〉において早くも活用されているのである<sup>1:324-325)</sup>。

これに対しフッサールからの影響は、主に《論理学研究》である。ヤスパーズは布伦ターノの記述心理学やこのフッサールの書物から、記述という概念の用途を学んでいる。例えば、《総論》第一章の第一節にある〈対象意識〉という項目では、まず「対象は知覚あるいは表象として心に描き出される」とし、この知覚や表象の働きの一つとして〈志向的作用〉という概念が用いられている。すなわち、知覚と表象は、感覚的な材料(赤とか青とか、ハの高さの音など)と空間的、時間的な性質と、志向的作用、という三つの要素をもつ。そしてこのうちで、志向的作用は感覚的な材料を生かし、これに対象的な意味を与え、一定の対象として定着させる働きをする。またこの志向的作用は、感覚的な材料という基礎がなくとも、例えば対象を眼で見えるように表象していても、現われることがある。この場合の志向的作用は、意識性と呼ばれる<sup>1:43)</sup>、と考えるのである。この考え方は確かに、「心理的現象はすべて、その現象自体のなかに、対象と呼ばれるべきあるものを含有する」という布伦ターノの記述的心理学、そして「現象学は諸体験の純粹記述的研究である」というフッサールの記述的現象学の立場を十分に踏まえている。

では、ヤスパーズとフッサールの記述に対する分れ道は何か。ヤスパーズは記述をする作用を、対象の扱い方によって二つに分けている。すなわち対象が感覚的材料として現われる場合は志向的作用といい、対象が感覚的材料として

現われない場合は意識性と称している区別である。この区別は、ヤスパーズが〈記述体験〉というものを、経験的意識と純粹意識との両面からみていることを物語っている。しかしヤスパーズは、了解心理学を重視し追体験や感情移入を通して記述と了解とを問題なく接続させうると考えていたために、記述や了解の扱いには経験的意識と純粹意識の両方があってもよく、このうちのどちらか一方に記述体験や了解関連を徹底させる必要はなかった。しかも記述体験のこの両面的理解は、ヤスパーズばかりでなく、ウェーバーによる当時のフッサール現象学の受け留め方でもあったのである<sup>14)</sup>。

## 〔7〕

この事情を次に、フッサールの側から考察してみよう。フッサールの現象学は通常、その思想上の特徴から三つの時期に区別されている。第一期は、《論理学研究》(1900-1901)に代表される記述的現象学の確立する時期である。第二期は、《純粹現象学および現象学的哲学の諸考察》(1913)に代表される超越論的現象学の確立する時期である。そして第三期は、主に《ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学》(1936)に代表される、いわゆるフッサール後期現象学の時期である。無論、ヤスパーズがフッサール現象学の第一期の思想に影響されていることはいうまでもない。ところがフッサール自身は、1907年のある手稿で、新たに獲得された超越論的現象学の立場について、《論理学研究》を念頭におきながら、次のように書いている。

「《論理学研究》は現象学を記述的心理学のように思わせている(その研究においても、認識論的関心が決定的なことであったが)。しかしこの記述的心理学は、しかもそれが経験的現象学として理解される場合は、超越論的現象学と区別されなければならない——。

私の《論理学研究》で記述的心理学的現象学と呼ばれていたものは、しかし単なる体験の領域を体験の实的内実に従って捕えている。体験は体験する自我の体験であり、その限りそれは自然の客観性に経験的に関係づけられている。認識論であろうとする現象学にとって、すなわち〈アプリアリ〉な認識の本質

論にとっては、しかし経験的な関係はどこまでも排除される。かくて超越論的現象学が生じるのであるが、このような現象学は実際は《論理学研究》の中でも、断片的に述べられていたのである。<sup>15)</sup>

かくてフッサールは、《論理学研究》が主に記述的体験の経験的関心を研究したことを反省し、認識の本質論であろうとする超越論的現象学は、このような記述的現象学と明確に区別されるべきことを主張する。すなわちフッサールは、ブレンターノにおいて記述的心理学に用いられていた志向性、そして自分の《論理学研究》で記述現象学的に使われていた志向性を、超越論的現象学の概念として純化したのである。志向性から経験的不純物を完全に排除したのである。このような志向性の概念こそ、以降のフッサール現象学の中心概念であり、またフッサール現象学の影響下に開化した実存哲学的あるいは現象学的精神分析の中核となる。

例えば、メタル・ボスと並んで現象学的精神分析の源流となったビンスワンガーは、「心理学の遺産は志向性に対する盲目である」<sup>16:3)</sup> というフッサールの語句を念頭に入れて、次のように書いている。

「もちろん現象学者ととも、いろいろな属性や特徴の記述的に正確な把握を必要としますけれど、それは決してそれらの記述それ自体を目的としているためでも、それらを概念の構成要素として用いることを目的としているためでもなく、これらの記述された属性や特徴から出発して、つねに事象それ自身へ、つまり対象そのものの直観へと到達しようとするためなのです。」<sup>16:44)</sup>

ヤスパーズの記述は、記述それ自体が目的でなく、一方では記述を構成要素として用いる説明へ接続し、他方では同じく記述を構成要素として用いる了解へ接続している。そしてヤスパーズの精神病理学は、記述、説明、了解、という三つの方法論的概念を、記述—了解、記述—説明、了解—説明、という関連においてみる解釈学的基盤に踏み留まる。そして包括者の哲学は、病める人間—実存的人間は〈了解—説明〉を解釈学的に接続させることによって解決できないこと、了解—説明の間には無限で汲み尽せない広い土地のあること、を自覚したとき、すでに実存理性の思索を開始していたのである。



これに対しフッサールの記述は、《論理学研究》では記述それ自体が目的のようにみえたが、《現象学の理念》で明確になったように、この記述は実は現象学的還元によって事象そのものへ、対象そのものの本質直観へと迫ってゆく一つの段階にすぎなかったのである。

## 〔 8 〕

かくてヤスパーズは、精神病理学の方法を哲学的に考えて精神病理学の限界を定め、そうしておいて次に、人間存在そのものを哲学的に考えて包括者の哲学を確立した。ヤスパーズの精神病理学から哲学への転進、そしてこの哲学を基盤とした《総論》の第四版は、科学を包括者のみ見る立場、患者を一人の全体的人間として把握する立場なのである。

これに対し、フッサールの記述的現象学から超越論的現象学への発展は、《ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学》<sup>17)</sup>で、方法論的に最終の地点に到達した。この書物は、純粋数学や精密自然科学を含む実証科学が絶えず大きな成果を挙げてきたのに、なぜ人間の根本的生活に危機が迫っているのかを、超越論的現象学の課題として明らかにしようとする。そして客観学的な世界と、その意味基底としての生活世界とを対比し、科学の基礎を生活世界に根付かせようとする。フッサールは、学問の危機とは学問が生に対する有意味性を喪失したことにあると考えるのである。フッサールの《危機書》は、この主題を含蓄ある強靱な思索を随処に展開しながら執拗に追求する<sup>18)</sup>。この場合、精神科学としての精神医学も無論、客観学的な学問の世界に入るから、精神病理学は当然、その意味基底としての生活世界との関係を問われる。精神病理学は、その存在論的基盤が問われるのである。

フッサールの《危機書》における超越論的現象学の問題意識を概略このように捉えれば、この問題意識のおお枠は、ヤスパーズの包括者の哲学における問題意識のおお枠と、相似的に対比できるのではあるまいか。両者とも、科学を限界づけ、これを一方は包括者によって、他方は生活世界によって、その意味基底を根拠づけようとしているからである。

もとよりフッサールの関心は、諸科学全般に対する生活世界全体の根拠づけの問題であり、個別科学に対する生活世界の問題は、その応用にすぎない<sup>19)</sup>。そしてこの応用学のめざましい発展例として、現象学的精神病理学も位置づけられる。しかし従来の実存的あるいは現象学的精神病理学は、実存的存在論的側面を重視するあまり、科学的側面を軽視する傾向が強く、再びフッサール後期現象学の問題意識のおお枠を正しく読みとる必要を促がされている。本来、超越論的現象学は、記述や説明とか了解を排除したのではなく、現象学的還元によって事象の本質へ迫るべく、その過程でこれらの概念を一時的にカッコに入れただけであるから、これらの概念の経験科学的能力は、現象学的精神病理学においても十分に活用されるべきものであったのである。

これに対し、精神医（哲学者）として個々の患者を全人格的に把握しようとする包括者の哲学は、ヤスパーズが当初は精神医学から出発しながら精神医学の限界を踏まえ、その上で交通や伝達によって患者と実存的に交流を図るゆえに、科学的方法をその限界内で使用することを最初から全く拒んでいない。かくして、科学を根拠づけようとする生活世界の存在論と、科学の限界を踏えた包括者の哲学とは、記述の理解に端を発して大きく分れた道を歩むようになりながら、現代世界の思想的危機に臨み、これに精神医的（哲学的）診断と治療を加えようとする姿勢において、交通し合流して新たな哲学の発展に寄与する実相をもっていると思えるのである。

## 注

[本文の中で、例えば1:13)とあるのは、注1)の書物の13頁であることを示す。]

1) ヤスパーズ《精神病理学原論》第一版 西丸四方訳 1971年 みすず書房

2) 現代の薬理学の進歩の程度を知る例として、次の書物を参考にした。

S・H・スナイダー《狂気と脳》——分裂病の精神薬理——加藤 信他訳 1976年 海鳴社

しかし同時に、高度管理社会における医療の限界を知ることの必要を、次の書物から十二分に教わった。

イヴァン・イリッチ《脱病院化社会》—医療の限界—金子嗣郎訳 1979年 晶文社

3) ヤスパーズ《精神病理学総論》第四版 上, 中, 下巻 内村祐之, 西丸四方, 島

村敏樹, 岡田敬藤訳 岩波書店 1958年

- 4) ヤスパース《理性と実存》草薙正夫訳〈世界の大思想〉Ⅱ—12所収 306頁 1968年 河出書房新社
- 5) ヤスパース《哲学Ⅱ》「実存開明」草薙正夫, 信太正三訳 1964年 創文社
- 6) 3)の上巻
- 7) 3)の中巻
- 8) 3)の下巻
- 9) H.-G. Gadamer; Wahrheit und Methode, Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik, Tübingen, 1960
- 10) ポール・リクール《解釈学の革新》久米 博, 清水 誠, 久重忠夫訳 1978年 白水社  
 リクールは, 説明と了解の関係を, 参加と疎隔の弁証法(解釈学的現象学の弁証法)として解決しようとしている。特に I. 説明と了解 VI. 解釈学の課題 VII. 疎隔の解釈学的機能など。
- 11) ヤスパース《マックス・ウェーバー》樺 俊雄訳 1965年 理想社
- 12) 《臨床精神医学研究》西丸四方 1971年 みすず書房
- 13) M. ウェーバー《ロッシャーとクニース》二分冊 I. 1955年 II. 1956年 松井秀親訳 未来社  
 ウェーバーのこの書物は, 明証性をもって解明可能な客観性の問題を追求し, 克明に分析しているが, その中で精神病現象を法則論的知識として部分的に概念構成し, 了解可能となしうると考えている。(例えば, I. 140頁 II. 16-17頁 25頁 40頁など) ヤスパースの精神病理学は, この論拠に基づいた画期的な応用と展開であったといえるであろう。
- 14) 例えば, 13)の《ロッシャーとクニース》I. 82-84頁, 特に注(6), 115-116頁, ここでの問題は, 単に概念の諸要素の記述的分析であり, ただ混同を避けて区別することであって, 一方のみに純化徹底することに関心が払われているのではなかった。
- 15) E. Husserl; Die Idee der Phänomenologie, s. IX Martinus Nijhoff, 1973
- 16) ビンスワンガー《現象学的人間学》荻野恒一, 宮本忠雄, 木村 敏訳, 1967年 みすず書房
- 17) E. Husserl; Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Husserliana Band VI, Martinus Nijhoff, 1976
- 18) 次の書物は, フッサール現象学のかかる本質を正当に継承しながら, 諸科学と生活世界との関係を, 弁証法的に把握しようとする方法論に, 注目すべき成果を挙げていると思われる。  
 S. シュトラッサー《人間科学の理念》——現象学と経験科学との対話——徳永

恂, 加藤精司訳 1978年 新曜社

また次の書物は、諸科学との関係は問題としないが、生活世界の基底的な意味を現象学的に正しく追求し解明した注目すべき成果を挙げている。ここで解明された生活世界を如何にして諸科学と接続するかが、次に問われるべき困難であるが重大な問題となろう。

W. ブランケンブルク《自明性の喪失》——分裂病の現象学——木村 敏, 岡本進, 島 引嗣共訳 1978年 みすず書房

- 19) 例えば、フッサールの現象学とウェーバーの理解社会学とを総合しようとしたアルフレット・シュッツの現象学的社会学は、フッサール自身から賞讃された応用例の典型である。

A. Schütz; *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: eine Einleitung in die Verstehende Soziologie*, Vienna, 1932. A second, unrevised edition: Springer-Verlag, 1960

—————; *Gesammelte Aufsätze*, Band I (1971): *Das Problem der sozialen Wirklichkeit*. Band II (1972): *Studien zur soziologischen Theorie*. Band III (1971): *Studien in Phänomenologischen Philosophie*. Den Haag: Martinus Nijhoff.